

薩摩硫黄島の火山活動解説資料（令和3年2月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

火山性地震や微動の発生状況に特段の変化はありませんが、夜間に火映が観測され、時折噴煙が高くなるなど、長期的には熱活動が高まった状態が続いています。

これらのことから、硫黄岳火口中心から概ね0.5kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスにも注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

なお、火山活動に変化はありませんが、噴火警戒レベルの改定に伴い、3月8日（期間外）に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表し、警戒が必要な範囲を、これまでの硫黄岳火口中心から概ね1kmから、概ね0.5kmに変更しました。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1～2、図3-①、図4-①）

硫黄岳火口では、2020年10月7日以降、噴火は観測されていません。白色の噴煙が最高で火口縁上800m（1月：1,200m）まで上がりました。また、高感度の監視カメラで夜間に微弱な火映を観測しました。

・地震や微動の発生状況（図3-②③、図4-②③④、図5）

火山性地震の月回数は119回（1月：144回）で先月より減少しました。このうち、高周波地震の月回数は30回（1月：25回）でした。震源が求まった火山性地震は、硫黄岳火口付近の深さ0km付近でした。

火山性微動は、2020年9月15日以降発生していません。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<https://www.data.jma.go.jp/fukuoka/index.html>）や気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（令和3年3月分）は令和3年4月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、京都大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、海上保安庁及び三島村のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

・火山ガスの状況（図3-④、図4-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり900トン～1,100トンで、先月と大きな変化はありませんでした（1月：300トン～1,800トン）。

・地殻変動の状況（図6、図7）

GNSS連続観測では、島内の一部の基線で、2020年7月頃からわずかな縮みが認められていましたが、その変化は鈍化傾向です。



図1 薩摩硫黄島 噴煙の状況（2月24日、岩ノ上監視カメラによる）
白色の噴煙が最高で火口縁上800m（2021年1月：1,200m）まで上がりました。



図2 薩摩硫黄島 火映の状況（2月25日、岩ノ上監視カメラによる）
高感度の監視カメラで夜間に微弱な火映（白枠）を観測しました。

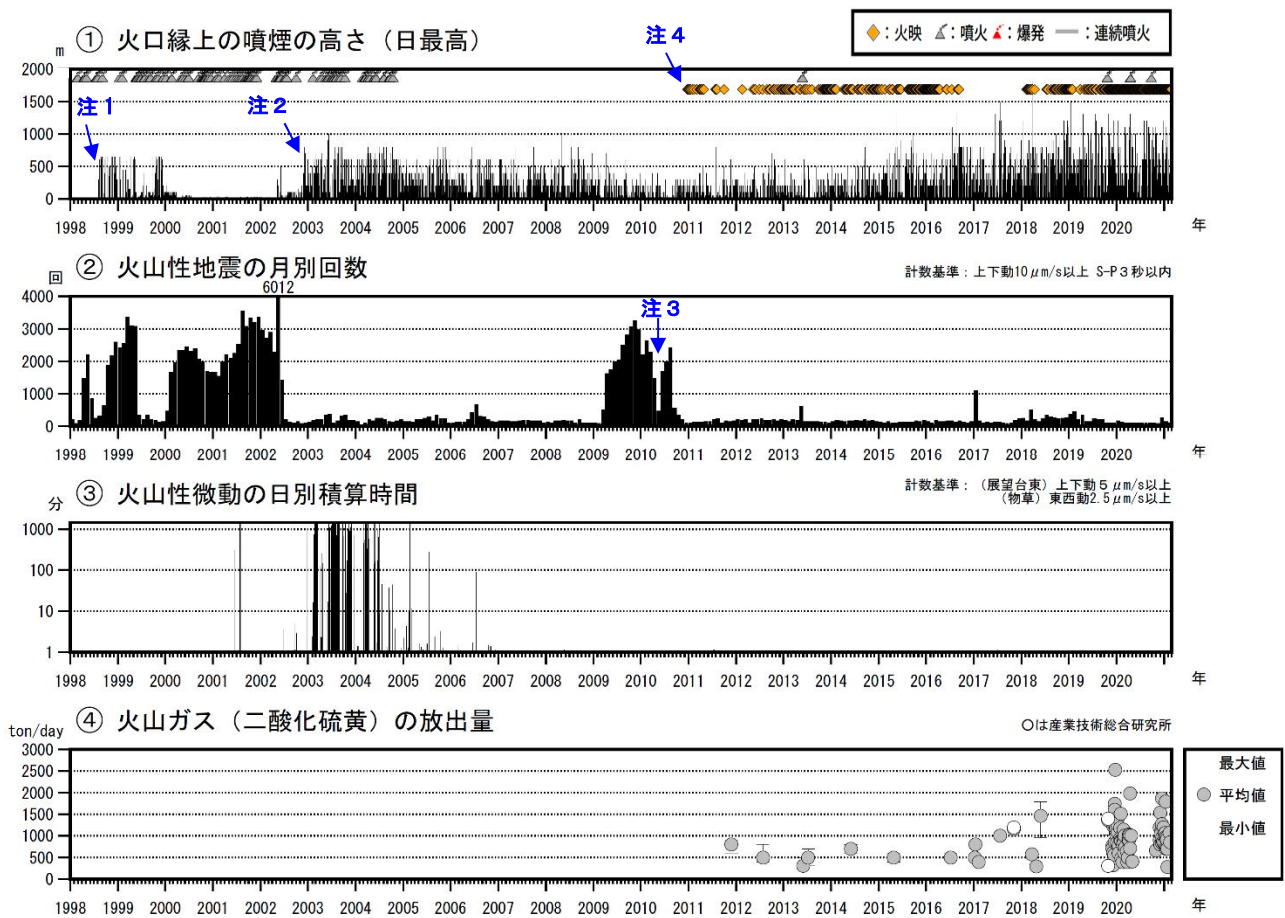


図3 薩摩硫黄島 火山活動経過図（1998年1月～2021年2月）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁は2019年12月より火山ガス（二酸化硫黄）放出量の観測を始めました。

注1 1998年8月1日：三島村役場硫黄島出張所から気象庁へ通報開始。

注2 2002年11月16日：気象庁が設置した監視カメラによる観測開始。

注3 2010年1月から7月にかけて、地震計障害のため火山性地震及び火山性微動の回数が不明の期間があります。

注4 気象庁が設置した監視カメラの高感度化により火映の観測が可能となりました。

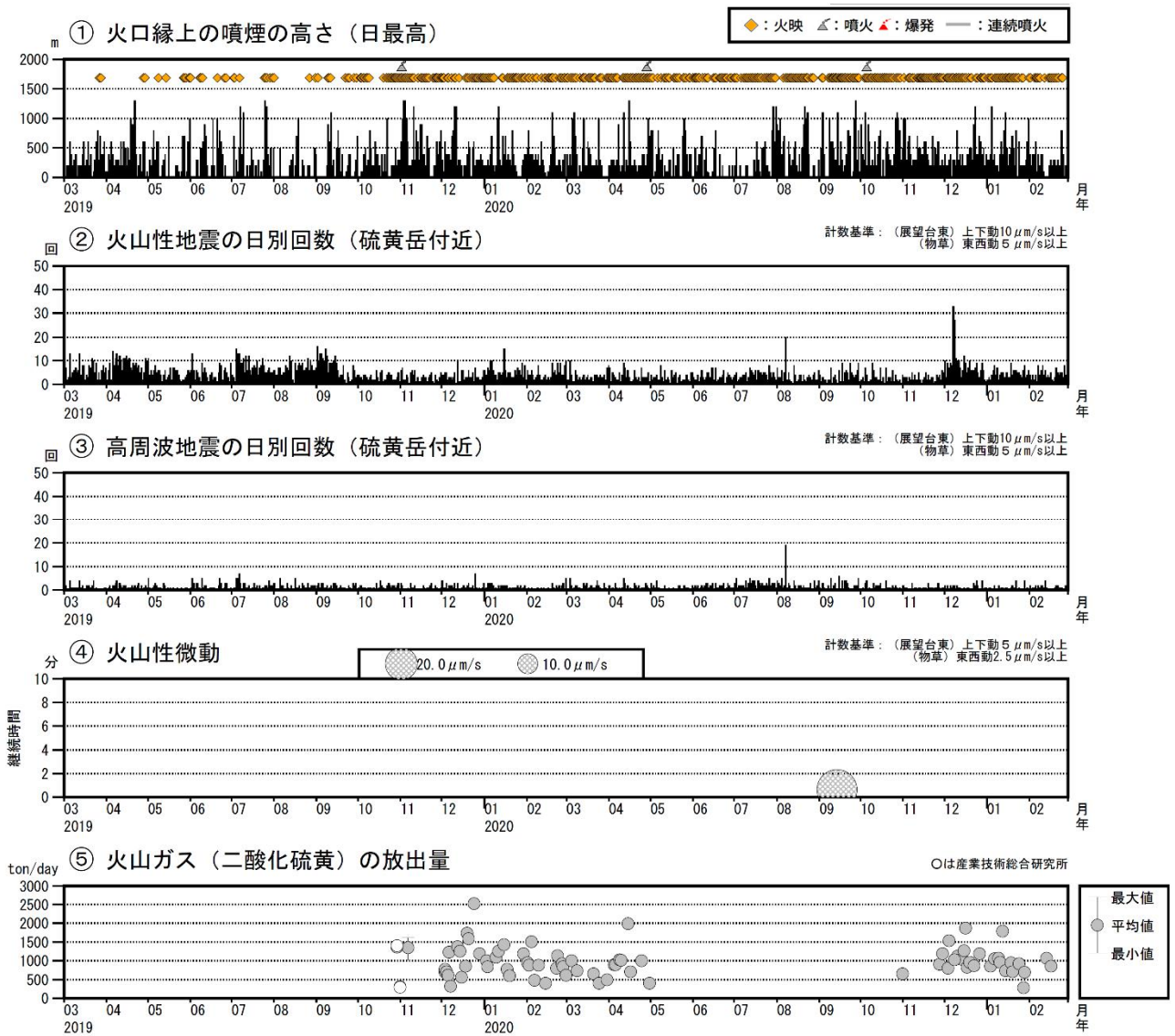


図4 薩摩硫黄島 火山活動経過図（2019年3月～2021年2月）

< 2月の状況 >

- ・ 2020年10月7日以降、噴火は観測されていません。
- ・ 白色の噴煙が最高で火口縁上800m（1月：1,200m）まで上がりました。
- ・ 硫黄岳火口では、高感度の監視カメラで夜間に微弱な火映を観測しました。
- ・ 火山性地震の月回数は119回（1月：144回）で先月より減少しました。このうち、高周波地震の月回数は30回（1月：25回）でした。
- ・ 火山性微動は、2020年9月15日以降発生していません。
- ・ 火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり900～1,100トンで、先月と大きな変化はありませんでした（1月：300～1,800トン）。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁は2019年12月より火山ガス（二酸化硫黄）放出量の観測を始めました。

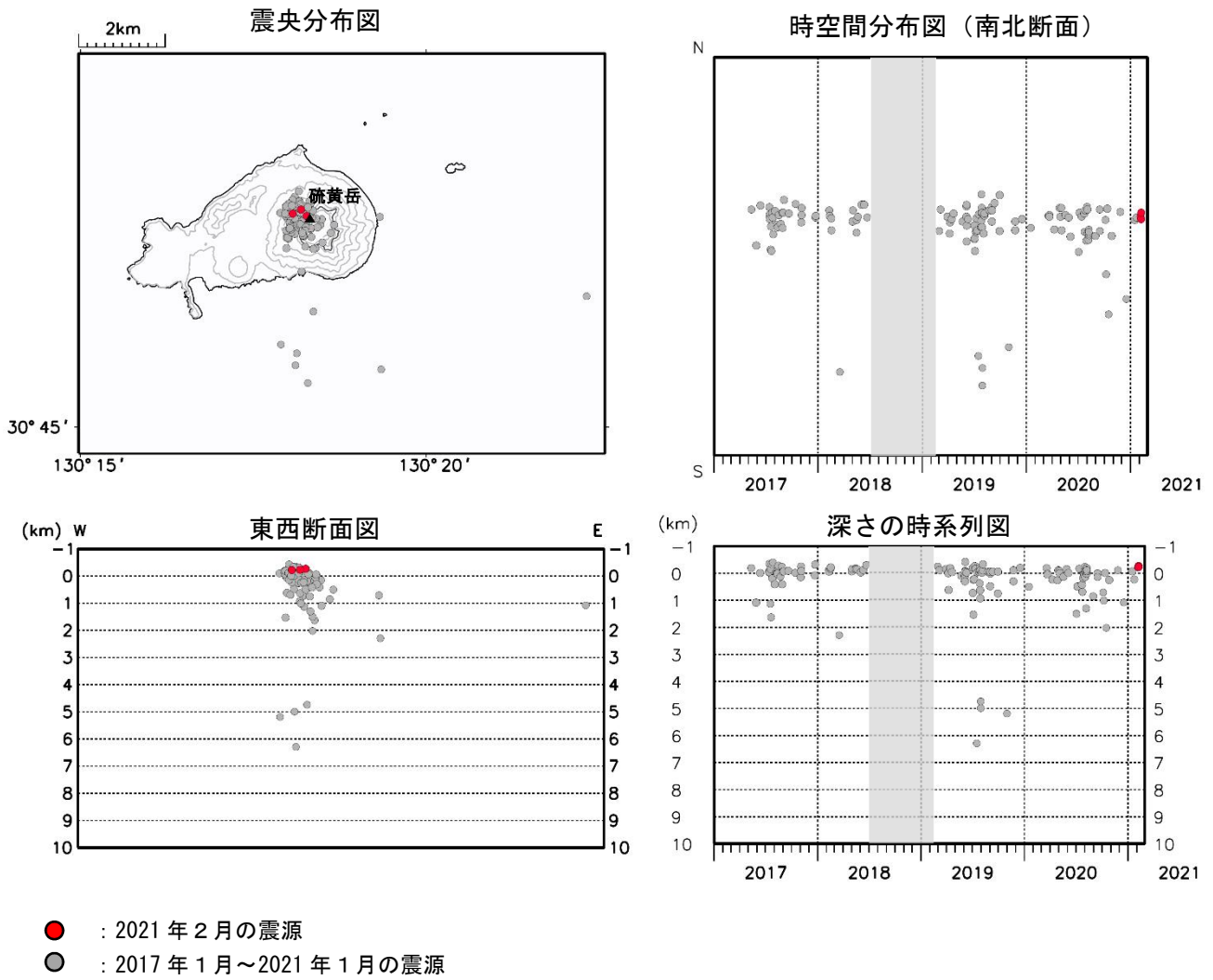


図5 薩摩硫黄島 火山性地震の震源分布図（2017年1月～2021年2月）

< 2月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、硫黄岳火口付近の深さ0 km 付近でした。

地震計障害のため、2018年6月28日～2019年2月28日（灰色部分）にかけては震源が求まっていません。

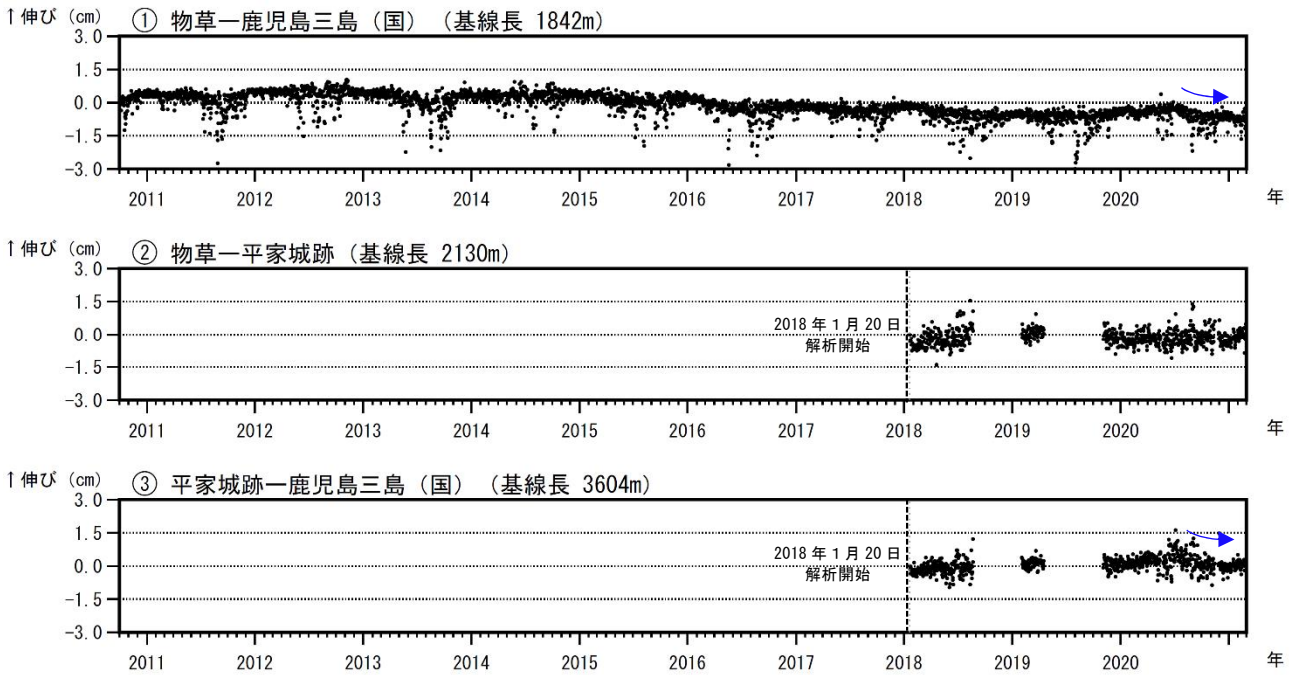


図6 薩摩硫黄島 GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月～2021年2月）

GNSS連続観測では、島内の一部の基線で、2020年7月頃からわずかな縮みが認められていましたが、その変化は鈍化傾向です。

この基線は図7の①～③に対応しています。
 基線の空白部分は欠測を示しています。
 (国)：国土地理院

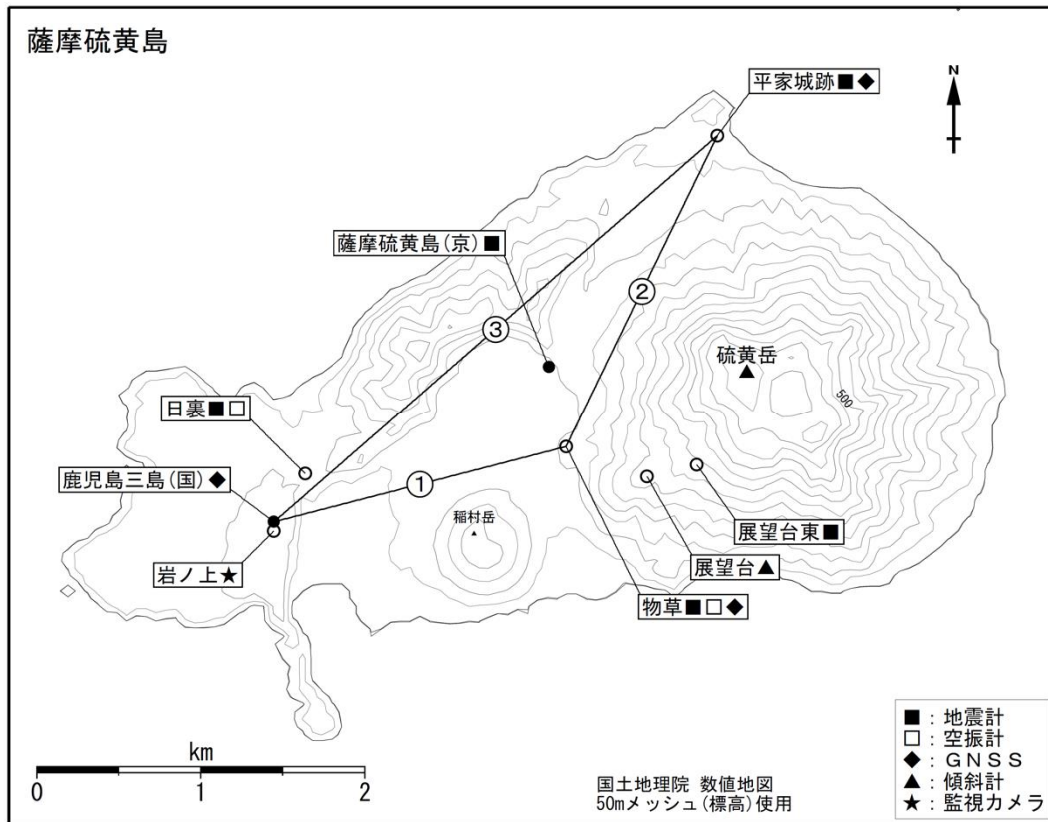


図7 薩摩硫黄島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(京)：京都大学

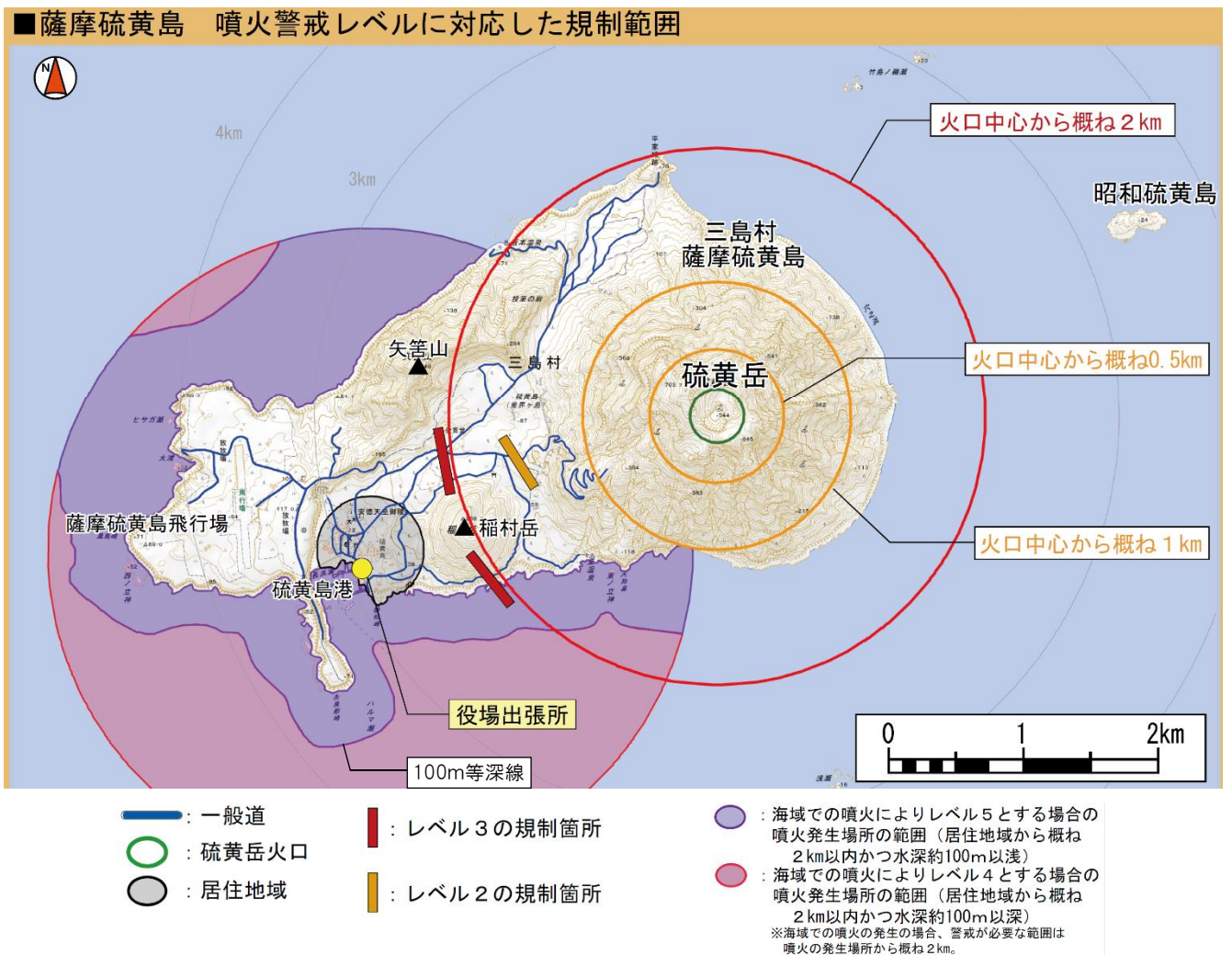


図8 薩摩硫黄島 警戒が必要な範囲

薩摩硫黄島では、噴火警戒レベルの改定に伴い、火山活動に変化はありませんが現在の活動の状況から、8日14時00分に警戒が必要な範囲を、これまでの硫黄岳火口中心から概ね1kmから、概ね0.5kmに変更する火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。

硫黄岳火口中心から概ね0.5kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスにも注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

この図は、国土地理院「地理院地図」を使用して作成しています。

100m等深線については、海上保安庁刊行の「沿岸の海の基本図」から採取しました。